
ハロウィン企画「幼馴染」@妄想部

妄想部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン企画「幼馴染」@妄想部

【Nコード】

N0693Y

【作者名】

妄想部

【あらすじ】

幼馴染は微妙な関係。社会人の久美と高校生の充がそんな関係で頑張るお話です。

今回は匿名投稿なので、どの妄想部員が書いたものか予想するお楽しみ付き 解答編は明日11月1日18時に投稿予定です。詳しくは活動報告にあります。

ハロウィンの日

「ふう……」

温かいミルクココアを用意して、コタツでくつろぐ。明日は土曜日だから仕事は休み。特に予定もないからゆつくり出来る。

本を読もうかな。DVDを見ようかな。買い物に行こうかな。

仕事忙しいわけでも、嫌いでもないけど、休みの日のことを考えるだけで楽しい。久しぶりに映画見たいかも。

せつかくゆつくりしてたのに、勢いよくドアが開いた。うるさいな。

「久美い、おなか減ったあ」

ズカズカと入り込んできた充が、背中から圧し掛かってくる。母さんが開けたのかな。いつ帰ってきたんだろう。

「重いよ」

「いいじゃん、別に。ねえ、久美、おなか減ったってば」

何でこいつはこんなに気安く触るんだろ。充はすぐにべたべたしてくるけど、別に私達は恋人同士じゃない。

「わかったから、退いて」

溜息を吐きながら、洪々キッチンへ移動する。充もそのままくっついて。こういうの、本当やめてほしい。心臓に悪い。

時間も時間だし、冷凍庫にあったうどんをゆでるだけ。たまご、わかめ、かまぼこ、天かす……くらいしかない。

「いただきます！」

出来上がったうどんを嬉しそうに食べ始めた。

高校生って夜中出歩いちゃだめなんじゃなかったっけ。出歩くっていつでもすぐそこだけど、今10時過ぎ。充は同じマンションの同じ階に住んでいる。小さな頃からずっと同じマンションだから、いわゆる幼馴染。あちあち言いながらうどんを食べる充。その端整

な顔立ちを眺める。うらやましい。

「ごちそうさまでした！　ねえ久美、ハロウィンって知ってる？」
「知ってるよ、それくらい」

この時期ショッピングモールやケーキ屋さんに行くと、ハロウィンの飾りで賑やかになってる。かわいかった、それだけの理由で、私も部屋にかぼちゃの飾りを置いている。

「じゃあさ、ハロウィンの日遊びに来るし、お菓子用意しといてね！」

「何それ。充もお菓子持って来るの？」

「うん！　今さー駅前のケーキ屋で林檎まるごと使ったパイが売っててマジ旨いの」

強引にハロウィンの約束をさせられ、一時間も経たないうちに充は帰宅。何しに来たの。あ、うどん食べにか。

「久美」

充が帰った音に気付いた母さんが、台所に入ってきた。

「どうしたの？　充くん、もう帰ったの？」

「帰ったよ。おなか空いたんだって」

「うどん食べたの？　母さんも食べたいなあ」

そういつて作って欲しそうにじっと見てくる。いいけど。いいんだけど。

「太るよ？」

最近体重計に乗るたびに唸ってるくせに。

「さて、寝ようかなー」

わざとらしい逸らし方につい笑ってしまう。いい年したおばさんなんだけど、かわいらしい人だと思う。自分の母親をほめるのもなんだけど。

「久美は太らなくていいなあ」

確かに太る体質じゃないけど。親子なのに何でこんなに体質が違うのかな。

「広川さんちも大変ね、相変わらず夜遅いみたいで」

「母さんも充分夜遅いと思うよ」

広川さん、充のお母さんは飲食店、母さんはデパートで、どちらも夜遅い。充は料理が苦手だからよくうちに食べに来る。

「んー、まあ、遅いといえば遅いかー。久美みたいに6時とかに帰りたい」

それだと母さん、出勤時間が4時間くらい早くなるけどね。朝弱いくせに。

日曜日は家でゆっくりすると決め、土曜日はひとりで買い物に行くことにした。映画館をのぞいて、見たい映画があれば見ようかな。お気に入りのショップをめぐり、洋服や靴、雑貨を見て回る。ハロウィン用のお菓子も買わないと。

「あ……」

充だ。綺麗な女の子と腕を組んで歩いてる。課外の帰りなのか、二人とも制服姿。

「高校生、だなあ」

お似合いの、高校生カップル。彼女いるくせに、人に抱きついたりして、悪いやつだ。ああ、女扱いしてないから抱きついたりするのも。

私は19歳で、充は18歳。年齢だけ聞くと問題なさそうなのね。19歳社会人二年目と、18歳高校三年生。もっと年を取れば気にならない年齢差も、この年だとちよっと、って感じ。

「高校生には高校生がお似合いだね」

胸がジクジク痛むなんて、気のせい。

「やっぱり彼女、いたんだなあ」

それはそうだ。頭は悪いけど顔は良くて、優しいし。

「はあ……」

買い物は日曜日にすればよかった。そうすれば見なくてすんだかもしれない。傷つかずにすんだかもしれない。

「今更何を言っても、」

「事实は変わらない。泣いてなんかない。そんなに充のこと好きじゃないかった。全部、気のせい。」

「久美、ただいま!」

「……おかえり」

「学校から直接寄ったみたいで、学校指定のバッグを持ったまま。」

「じゃーん、まるごとアップルパイだよ! 紅茶淹れてー」

「催促されるまま、紅茶を淹れる。淹れると言ってもティーパック。コーヒーなら豆があるけど、紅茶はない。母さんはコーヒー派、私はココア派。」

「球体のパイにフォークをいれる。サク、とパイ生地を進み、甘く煮た林檎が顔を出す。ほんのりと温かく、シナモンの香りが漂う。」

「美味しい」

「でしょー?」

「充はにこにこ楽しそう。心臓がきしきしする。」

「久美のお菓子?」

「……ないよ」

「用意しなかった。忘れていたわけじゃない。わざとだ。そんな気になれなかっただけ。」

「また今度買ってくる。ごめん、調子が悪いの、寝るね」

「返事を待たず、引きこもる。ベッドにもぐり、目をぎゅゅとつむった。」

「久美」

「ドアがノックされ、開かれた。私返事してないのに。」

「どうしたの? 風邪?」

「ゆっくりと布団越しの背中を撫でる、充の手。大きくて、筋張っていて、いつの間にか男の人の手になっていた。昔は私の手の方が大きかったはずなのに。」

「ストレス」

「会社で何かあったの？」

首を横に振る。

「……美人に生まれたかった」

「は？」

もう二年、あとに生まれたかった。充と同じ年になりたかった。

「充の、彼女みたいな美人になりたかったな……」

「は？ 彼女？ ……ねえ、久美」

ばさりと、布団がはがれた。寒い。

「何」

「……お菓子ないならさ、いたずらしちゃおっかな」

充が私の頬に触れた。後ろ向きだから、顔が見えない。充、今どんな表情^{カオ}してるの。

そのまま首筋を撫で、背中を撫で、腰に触れる。

年下だとか、高校生だとか。もう、どうだっていい。

「いたずら、して」

私は振り向いて充の背中に手を回した。

その後

目が覚めると充の腕の中。いつの間にか寝てしまってたみたい。ちらりと充の顔を盗み見る。充も寝てるみたい。

いたずらしてだなんて、恥ずかしいセリフ。目をつむって考える。私から仕掛けたとはいえ、充はどういうつもりなの。無意識のうちに溜息がもれる。

「久美」

後頭部にキスされた。

「充、起きたの」

「起きた。おはよ」

またキス。

「あー幸せ。卒業まで無理だろうって思ってたのに、本当予想外」
「え？」

充がクスクスと笑い、回された腕に力がこもる。

「俺が高校生だから、気にしてたんでしょ。知ってる」
耳にキスされ、リップ音が響く。恥ずかしい。

「久美、好き。大好き。小さい頃から、ずっと」

嘘だ。最近のスキンシップ過多はともかく、今までそんな素振り、微塵も見せなかった。それに、彼女。

「彼女なんていないよ」

「嘘。見たんだから、一昨日、駅前で」

「一昨日……ああ！ 女子と一緒にだったけど、付き合ってたし」
「でも、腕組んでた」

「スキンシップ過剰なだけだよ。俺の周り、皆そんなだし」

だから充もここ数年スキンシップが激しくなったの。

「俺の彼女は今日から久美でしょ？」

「彼女……」

「うん、彼女。今更って感じもするけど、ずっと一緒にいてね」
幼馴染だから、確かにずっと一緒だった。就職したらさすがに交流がなくなるかな、って思ってたけど、充は相変わらず家に来るし。充は地元の専門学校に入学だから、受験もなくて、引越しもしい。クリスマスとかバレンタインとかお互いの誕生日とか、毎年欠かさず一緒にいた。約束するってわけじゃなくて、毎年恒例って感じで。彼女はいいの、って何度も聞いたけど、いないって答えしか返ってこなくて。

「ペアリング買いにいこ。仕事中也つけててね。虫除けしないと」
「虫除けって……私を好きになる人なんて、充くらいだよ」

シンプルなデザインなら、仕事中でも装飾品は禁止されてないけど。でも、虫除けの心配はいらない。だって告白されたことなんて今まで一度もないから。これってかなり珍しいんじゃないかな。

「そんなことないんだけど。今までは近かったから色々出来たけど、さすがに職場まではね」

「え？」

「何でもなーい。ね、明日の夕方いこうね」

「うん……」

嬉しい。当たり前だけど、ペアリングなんて初めて。

「今日はまだハロウィンだから、いたずらの続きしようね」

「え!？」

まだするの？ 初心者なんだから、手加減して！

必死の訴えも空しくいたずら再開、……次の日は筋肉痛になりました。

END

「ただいまー」

「母さん、おかえり」

「手伝って！ 重い！」

「何これ、どうしたの？」

「読書の秋でしょ、いっぱい本買って来たの」

「珍しいね。老眼になってから読まなくなったのに」

「見て見て、特集が面白そうでねー」

「え？」

「オンナノコのためのセツ。ス上達法」

「はあっ！？」

「ツ。ヤ行ったらあつたの。本当はDVD借りに寄っただけで、だつてほら、久美初心者だし、充くんのために勉強したらー？」

何
故
知
っ
て
る
！
？

その後（後書き）

さて、これを書いたのは誰でしょう？

まあバレバレだとは思いますが……だがしかし。今回誰かさんが自分っぽく書いてるので（笑）たまされる方もいらっしやるかと。ふひひ。

さて。

ルール上、あとがきで作者名を明かすことになってますが、あえて明かさない！
消去法でお願いします。

うそです。

1話目のママンのセリフに注目！
セリフの頭の字を縦に読んでね！

以上、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693y/>

ハロウィン企画「幼馴染」@妄想部

2011年11月1日18時59分発行